第三節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その一

関東大震災は首都の興行施設を壊滅させ、新劇に係わる人々やその留守宅をも直撃した。新劇勃興の功労者市川左団次も、公演を前にして大地震に襲われ、自宅から上野、滝野川、東中野へと避難する。

大地震の衝撃と避難（市川左団次著『左団次芸談』）

（大正）十二年は六月の明治座を了えてから、九月は歌舞伎座に出演することとなった。

その九月一日である。午後一時から岡本綺堂氏作『鬼薙清吉』の本説があるので、まだ家にいると午前十一時五八分、関東一帯を襲ったあの大地震である。―土蔵の瓦が一、二枚落ちて、塀が少し倒れたきりで、大したこともないので、落ちついてみると、そのうち下町に異様な光を発する火の手が見えた。（猫いらず）の本舗だと云う。間も無く猿楽町の方から火が上ってきたと云う騒ぎ。大丈夫だと思っていたものの、女達がいたので、とにかく立退くようにと云い渡して、弟子達に荷物を頼み、妻の姉の上野の家に引上げた。私の家の辺は被害が殆ど無かったので、近所の人はまだ立退く気配も無く、私の家の者が一番早かったようである。

すると二日の晩になって、上野の山に火が廻ってきたというので、山の上は大騒乱を極めた。これは避難の人で山が一杯なので、後からきた人達が仕方なく、日暮里の方に続々と行くのを、山から逃げて行くものと誤っての混乱と後になって知れたが、私達も線路を伝って、滝野川の知人の家に移った。するとまた、朝鮮人云々の噂が近隣を騒したので、その知人の妹の家が東中野にあって、田舎の物持の娘でそこならば米も豊富に得られると云うので、自動車を一台見つけて、東中野の某家に落着いた。ところが先方は夫婦暮し、こちらは同勢七、八人で、なかなか米が足りないらしいのが解ってきて、気の毒になったので、私の車夫に米を探させて買ってこさせなどしているうちに、牛乳配達が中野野方村に家を見つけてきてくれたので、七日にそこへ引移った。まだ建てたばかりの家で、障子も張ってなかったが、結局その方が涼しいと云って、一カ月もそこに起き伏しをしていた。

東京で芝居を演ることは、まだ一年位は覚つかないと思っていたので、当分はそこに籠るつもりでいたところへ、大阪から話があったが、それは断ると今度はたしか十月の二日に京都から話があったので、十一月には京都で演らうということになった。

ちょうど小山内君は大阪に引移るといっているので、一緒に行くことにして、東海道線はまだ復旧されていなかったもので、上野から十月二日に発った。汽車の中は大混雑で一睡も出来ず、おまけに親不知のあたりで、夜二時頃に半時間近くも停車してしまったので、小山内君と車外に出て、名月の荒磯を歩きながら、灰燼と化した東京のことを語りあった。・・・

震災では貴重な書籍や書画骨董を灰にしてしまったが、立退く時には自分のものだけが焼けるので、また直ぐ集るとい気がしていた。岡本綺堂氏も震災後一時麻布に住まわれていたが、その話をするとやはり同じような気持であったと語られた。中野に落着いてからは、ことによると蔵だけは残っていて、その中のも

のは無事かも知れぬという気もしていたが、十日程経って行ってみると、やはり跡形もなかった。①

帝国劇場における自由劇場の公演が杜絶したあとも、市川左団次は活躍を続け、大正九年には新富座で岡鬼太郎作『今様薩摩歌』を、また歌舞伎座で中村吉蔵作『井伊大老の死』に出演した。さらに大地震の前年京都南座での公演に先立って、十月一日洛東の知恩院山門前で野外劇、松居松葉作『織田信長』が演じられた。松竹大谷社長の後援により左団次が主役を演じ、祇園花街の少女五十余名が稚児姿で舞い、小山内薫も演出に参加した。無料で提供されたこの野外劇には観衆十万人が押し寄せたとされる。②

大地震の翌年六月に刊行された改造社編『大正大震災誌』には、演劇の分野に関して河竹繁俊の論稿「歌舞伎劇に及ぼせる影響」とともに、戯曲家中村吉蔵の執筆「破壊前後の新劇」が収録される。この寄稿において中村は劇壇震災の概要を誌しつつ、営利主義を排除した新劇復興の理念を提起している。

中村吉蔵「破壊前後の新劇」(改造社『大正大震災誌』)

大正の大震災は帝都のあらゆる文化機関を片っ端から破壊し去ったが、その中でも殆んど字義通り破壊し尽されたのは劇場である。劇場が直に演劇の成立に必要な欠くべからざる条件であり、機関である以上は、そ

① 市川左団次著『左団次芸談』一五六―一五九頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』一五二―一五六頁。

れが破壊し尽されたといふ事は、演劇が一時的に滅亡した事になる。・・・さし当たり、震災前に漸く勃興して来て我が国の在来の歌舞伎劇に挑戦を試みつつあった新劇の過程と、今回の破壊に基づくその当面の影響とを一瞥しよう。

元来新劇とは旧劇、即ち徳川封建期の遺産たる在来の歌舞伎劇に対して、明治大正以後の新時代の精神を基調とし、西欧の近代劇の感化影響をその内容の上にも、又その形式の上にも著しく反応した新作戯曲の演出を意味するものであるのは云うまでもないが、西欧の近代劇の第一期が、主として自然主義乃至写実主義派の心理的解剖を重んずる傾向のものであって、従って小劇場形式の芸術であった如く、我国に起った新劇運動も亦多くはさうした趨勢を追うて、小劇場形式の芸術を打建てるための努力が続けられて行った。ところが在来の歌舞伎劇の大規模な芸術様式に適合すべく作られた所謂大劇場の、あの龐大な建築はこの種の新劇にあまり適合しているとは云へない。唯洋風建築のプロセニウム舞台を持った帝国劇場と、さらに西洋の中小劇場の建築様式をそのまま移植して来た有楽座とだけが、新劇の演出に最も適合していた。殊に有楽座が独特の壇場だったと云ってもよく、事実にも新劇の発祥地となった記録を作っている。

この有楽座の建築せられたのは明治四一年十二月で、在来の興行師の企業欲から離れて、華族富豪の有志者が新しい演芸を起さうとする多少の理想的計画のもとに成立ったものである。この劇場に於て明治四二年十一月小山内薫と左団次の自由劇場が、森鷗外訳のイブセン劇『ボルクマン』を上演して、西洋近代劇を初めて我國の劇界に紹介し、従来の新劇のために第一の烽火を挙げたのは、当時の一センセーションであった。その後数回自由劇場はこの舞台を利用して数種の西洋近代劇を試演すると同時に、新進の劇作家、秋田雨雀、長田秀雄、吉井勇等の創作戯曲をも紹介した。・・・

有楽座に次いで、若しくは相並んで新劇の為に相当の功績を残したのは帝国劇場である。同座は明治四二年の創立でルネッサンスの建築様式に則り、白煉瓦の巨大な楼閣を外濠に近く聳立させて帝都の一大美観であったが、プロセニアム舞台を持っていただけに、他の日本式大劇場の、舞台の間口のムヤミにだだ広いとは異ってその間口八間、奥行九間、プロセニアムの高さ四間、定員千六百三人であった。この舞台で文芸協会の『人形の家』が始めて公演せられ、松井須磨子が我が国最初の女優たる事を認められたのは明治四四年十一月である。・・・今回の大震災はそうした記念の舞台を焼尽したが、外郭はそのままに残っており、近く再建される筈である。その意味では有楽座の喪失に比べれば、我々の遺憾の度は幸に少ないと云わねばならない。

又歌舞伎座は日本式大劇場の或意味で模範的のものであったが、震災の二年前に失火して全焼した。一、二の例外を除いて新劇には殆んど縁がないが、大劇場形式の新劇発生の一基点と見る時には、大正九年五月坪内逍遙の新史劇『名残の星月夜』を上演し、次いで七月に自分の創作した『井伊大老の死』を上演しているのは記憶すべきものであろう。新築中に起った震災の被害は比較的軽かったようであるが、こんどは舞台間口十六間の設計と聞いては、今後の大劇場形式新劇場が果たしてそれに適合する可能性を持ち得るのか否かは相当の疑問である。猶この他に明治座、本郷座、市村座に浅草の公園劇場、三国座等の中には新劇運動と因縁があるものもあり、またそれぞれに新劇が旧劇若しくは通俗劇と雑居して、そこに多少の分布地図を描いていたが、震災のために悉く灰燼に帰し去った。これは一時的にも旧劇に対する大打撃であるが、同時に新劇に対しても亦相当の損害であるのは勿論である。・・・

我国に於ける新劇の第一期、即ち近代劇運動時代に於ては、ひたすら純芸術的な新劇の為に途を拓かんとする熱意と期待とに燃えて、そこに全力的な戦いが戦われたのであるが、それが途中で所謂民衆化の傾向へ転回して行った為に、必然に商業主義化されて来て、やがて創作劇が普通の営利劇場へ迎えられるべく都合の善い段取が付いたと同時に、創作劇そのものの半面には不純分子が鼠入する動機が醸されて、近代劇運動の当初の理想的な出発点とは距離があり過ぎるといふ批難が一部から加えられているが、それも強ら無稽の言として斥ける事はできない。・・・新劇がそうして普通興行に割込んで行った結果、帝劇や有楽座は暫く別として、日本式の大劇場の大舞台の上に、本来小劇場形式の新芸術が一時の間借り状態で、落着かない状態で雑居者の如く取扱われねばならなかったのは、敏感な鑑賞家の眼には一の醜態として映じたかも知れない。それだけならまだ宥されもするが、他の全く芸術のテンペラメントの異つてゐる歌舞伎劇などに混入して演出される点では、折角の新劇をして寄席興行の一余興扱いさせる遺憾がないとは云えなかった。その根源は即劇場の商業主義から来ていると云へば、それはたしかに誤りのない真理である。・・・

上演されつつあった新劇の内容、基調精神の問題に到つてはここで手軽に一掃的の論断は下されないが、その多くは自然主義乃至写実主義の範囲に止まり、若しくは一種の唯美主義に依拠していたと云つても大過はない。勿論近代劇運動の主潮の一はそこに關っているが、今全世界の実生活の地盤を震撼しつつある最も現実的なブルジョア対プロレタリアの抗争から捲起された思想感情の激しい渦巻、その渦巻のためにやがて崩壊して行こうとする錯覚的現代文化の運命、原始的に更生せんとして苦悶しつつある人間の魂の呻めき―そうした世界大戦以後の煉獄に投ぜられた人間の実生活図は、我國の既出の創作劇にはまだよく現われていない。・・・

破壊し去られた劇場を出来るだけ原形のままに再建したい、即ち復旧したい、その外面も、その内容をそ

のまま破壊前の遺業の承継であらせ度いというのが、恐らく興行当事者たちの願望ではあろう。そしてそれは多少の歳月を経たら、或いは遂げられて行くであろう。しかし、在来の興行当事者たちの手に支配された営利主義の劇場、即ち資本主義の傀儡であった演劇全体が、再び原形のままに復旧される事は、決して民衆の為に望ましい事ではない。又芸術の為に願わしい事ではない。破壊前に新劇が漸く發達期に向ったのは事實であるが、前已に述べた如くそれが到底奇形的な、変態的な傾向から離脱する事が出来なかつた主要な原因の大半は、資本主義の劇場組織の係縛から来ていることは明らかである。素より今回の破壊が資本主義そのものの破壊を意味しないで、却つてその回復の為に、より多く資本主義に依頼する一般形勢を助長するかも知れないし、少くとも劇場と資本主義との絶縁の如きはさし当り空想に過ぎないのは勿論であるが、一面においてその種の営利劇場以外に非営利的な、芸術劇場乃至民衆劇場が興起する好都合は正に到来したと云つて善い。破壊後の今日は正にバラック劇場の建設の許されてゐる時代である。破壊前に数百万の建築費設備費を要した為に、大資本を擁せなくては到底手の付けられなかつた新劇場の計画が今日ではその十分の一以下の費用で実行の可能性がある事になつた。演劇をブルジョア階級の手から奪還して、一般民衆もものとするには、いまこそその時である。劇場を資本主義の係縛から解放して、芸術本来の面目を自由に發揮せしむる機会は、今日を措いて他にない。この使命のために起たうとする有志の公共団体乃至公共機関が、漸く活動を始めつつある形勢も一部には見えている。我々はその活動の現実化を希望するに止まらない。今こそそうした活動の起されるのが、当然であり過ぎると思つてゐる。

破壊前の舞台上に演出されつあつた新劇の多くは、世界大戦以前前の西洋近代劇の脈を追つたもので、大戦後期のものでない事は已に一言した。素より芸術は個性的のものであつて、十年、二十年の歳月の経過、乃至時勢の変遷の為に動揺されるべきものではないというの一面の真理たるを失はない。しかし、同時に卓越した個性の天才が生んだ芸術も、時間的過程が常にこれを古典化しつある事も亦他面の真理である。世界大戦が人間の心理の上に、また社会の組織の上に一大激動を与え、一大覚醒を促した点ではまさに画時代的であつた。今回の大震災は自然の革命であつて、人為の革命ではないから、世界大戦に直面した西欧の民衆の受けた程の深遠な感銘を我國の民衆に与え得たとは云えないが、少くとも世界大戦後の西欧の民衆の動揺し混乱して、その渾沌の底から一縷の光明を望んでゐる心理の一端に、触れて行く鍵は慥かに我々の手にも握られたと云つて善い。世界の煉獄の苦は日本的にも体験されたに違いない。この体験事実が芸術殊に新劇の上に反映するのは当然期待されなければならない。……

破壊前の新劇の基調には、兎角ブルジョア趣味がこびり付いて離れなかつた。少くともブチ・ブルジョアの殻が破れなかつた。今回の震災は帝都の多くの人々が、その実生活上に被つていたブルジョアの殻を一挙に破砕し去つた。ブルジョアもプロレタリアも一時的に焦土の地平に立つて、一時一挙に原始人化した。所謂文化の仮面が落ちて、荒削りの生きいきした人間に還元された。その間に一面相互扶助の神的な美しい天性が發揮されると同時に、他面同族相食む獸的な醜い本性も亦暴露された。一度は坩堝に投ぜられて人間の地金が露出したのである。この前代未聞の、若くは一生に空前の体験が芸術、殊に新劇の上に投影したら、少くとも在来のブチ・ブルジョアの殻を破つたものが、發生して来なければならない。それは荒削りの野生に満ちた芸術か、若しくは人間愛憐のユーモア芸術か、或いはその他の一特色あるものか、何んにせよ、破壊前のものとは、その風格の相違した新劇が、この体験の中から生み出されて善い筈だと思つて。

なお破壊前から常に求められていた規模の宏い一大悲壯劇が、大民衆を抱擁する新芸術として出現せな

ればならないのは勿論である。小劇場形式の新劇以外に大劇場形式の新劇が続々創作され、また演出される事が、必要であるのは云うまでもない。①

島根県で旅館の息子として生まれた中村吉蔵は、公証人の書生や為替貯金管理所の書記を勤めた。苦学しつつ彼は早くから数々の小説を雑誌に投稿し入選する。やがて上京して広津和郎のもとに寄寓し、早稲田大学に入学。その後欧米での留学と遍歴によって演劇への関心を深め、帰国後島村抱月の主宰する芸術座に参加する。大正三年から大正八年にかけて彼の戯曲、『飯』や『剃刀』が帝国劇場で松井須磨子を主役として公演された。大正九年歌舞伎座で上演された中村の脚本、市川左団次出演の『井伊大老の死』も評判になる。②

大地震勃発のとき小山内薫は、家族とともに関西に滞在し、東京四谷の留守宅も被災を免れた。新劇再生の悲願をなお秘めて、ときを待つ小山内の心境を震災の惨禍は一層沈痛にした。演劇界の伝統と傾向に失望した小山内薫は、その後松竹キネマの研究所所長として招かれ、わが国初の劇映画『路上の靈魂』を軽井沢で撮影する。しかし、大正十二年の春松竹経営陣との紛糾もあって、すべての興行と劇団から離れ、書齋での演劇研究に専念していた。

① 中村吉蔵「破壊前後の新劇」(『大正大震災誌』改造社、一九二四年。)一七六一―一八三頁

② 大山功著『近代日本戯曲史』第二卷(大正編)四八〇―四八一、四八五―四九〇頁。

『新人物立志伝―苦学力行』大日本雄弁会、一九二二年。五四―六六頁。

大地震直後の苦衷(小山内薫「築地小劇場建設まで」)

私が昨年(三月、松竹と手を切った時)―それは私が日本の営利的劇場の総てに対して望みを絶った時でした。私は再び日本に於ける営利的の劇場には如何なる関係に於いてもは行って行くまいと決意しました。當時の私にとって「前途」はありませんでした。目の前は闇でした。私は唯書いて、僅に生活し、僅に自分を慰めました。

その内に私の思想の上に或黎明が来ました。それは独逸へ行っている土方が帰って来たら、二人で演劇学校を興すことでした。勿論この考えは余程前から私にありました。営利的劇場と全く絶縁するに及んで、もうこれより外に自分の行くべき路はないと思うようになったのです。

物質上の根柢があったのでもありません。組織上の同志があったのでもありません。私は唯ぼんやり併し強い希望を持って―土方が帰って来たら、二人でそれを始めようと思っていたのです。そしてそれを楽しんでいました。その考えは誰にも知られずに私自身を慰め且つ励ましていました。

大地震が来ました―その時、私は家族を挙げて地方にいました―東京の殆んど総ての劇場は焼け亡びてしまいました。私の心の中で半年前に亡びてしまっていた総ての劇場は目に見ゆる形の上でも亡びてしまったのです。

併し総ての劇場が亡びると共に私自身の希望も亡びてしまいました。演劇学校の建設などはもう当分思いもつかない事になってしまいました。少くとも十年のギャップが私の目の前に口を開いたのです。私にはも

う自分の生きてゐる間に自分の進まうとする道が一步でも歩けるか、それが疑わしくなつて来ました。第二の絶望が来たのです―しかもその絶望は私にとって最後の絶望でした。

私はその儘地方にいました。その儘東京へ帰りませんでした。私の友人は私が東京を見捨てたと云つて私を罵りました。だが私はその時東京を見捨てたものではありません。私が若し東京を見捨てたとすれば、もう半年前に見捨てていたので。私はもう半年前に東京の劇団を離れてゐました。東京の劇団はもう半年前に私を追い出していたのです。東京の劇団はもう私を必要としていなかったのです。もう私は何処にいようと好い体になつていたので。

私は何を罵られても黙つてじつとしていました。実際それについて一言の弁明もしませんでした。一言一句も書きませんでした。そして死よりも暗い絶望を抱きながら、黙つて静に毀れた東京を見ていました。震災後の東京の劇壇―すべてが亡びすべてが新しく生まれて来なければならぬ劇団―そこから生まれて来たものは果してなんでしょう。

営利劇場の基礎もない競争的宣伝、劇場の全滅を好い事にして、そここに首をもたげた忙しげな新劇団、バラック俳優、バラック演技、バラック興行師、

私はいよいよ絶望しました。もうどうにも救いようがないと思ひました。ひねくれた自分の根性かも知れません。徒らな反抗的精神からかも知れません。私は唯読んで書こうと思ひました。書いて読もうと思ひました。如何に叛かれても憎む事の出来ない演劇を、せまい書齋の内に、それよりも狭い自分自身の頭腦の内

に作り上げようと思ひました。①

小山内薫はひととき帰宅して、彼は東京の惨禍を見詰め、大阪への転居を決意する。次男宏の嫁小山内富子による評伝では、留守宅の無事と大阪での暮らしも語られる。

大阪への小山内転居（小山内富子『小山内薫―近代演劇を拓く』）

大震災のその夏、薫の三人の子供と登女子は、薫の大阪での仕事に便乗して夏季休暇の避暑地を神戸の六甲に選んでいた。四谷の留守宅には書生と女中と姉の礼子が残っていた。三男の喬は小学校の一年生で次男宏も、長男徹もまだ小学生であった。二期は九月一日から始まる。東京へ帰る準備も整つた前日の八月三十一日、三男の喬が突然腹痛を訴えたので、帰京は延期されることになった。ここへ東京周辺は地震で阿鼻叫喚の巷と化したのであった。「あのととき喬の腹痛という偶然がなかったら、私たちもどうなつていたかわかりません」と登女子は災難を免れたそのときの幸運をよく私との話題にした。・・・

薫は家族をそのまま大阪に残して、単身東京へ戻つた。一般人の上京は制限されていた。薫は新聞関係の報道員の身分証明書を持参しての一時帰郷であった。

四谷南町の留守宅は崩壊からも火災からも免れ、書籍類も無事であったし、病弱な姉礼子をはじめ書生や

女中も無事だったことを薫は何より喜んだ。東京周辺は一面の焼け野が原で、冷静さを失った巷には流言飛語が飛び交い、治安も悪く騒然としていた。薫は家族を大阪に足止めさせておき、これを機会にいよいよ書齋に籠る決意を固め、家族も大阪へ引っ越させることにしたのだった。

天王寺悲殿院町の家への引越し、そこはプラトン社中山社長の持ち家で、明治情緒の漂う大きな洋館だった。部屋数もたくさんあったので、小山内家一家が広い二階に住み、階下には妹の岡田八千代と松竹の女優さん親子と、薫の仕事の助手をしていた若き日の川口松太郎が、一部屋ずつを占めて、四世帯が二か所の台所を使って暮らすことになった。①

土方与志の夫人梅子は大正初期の日銀総裁、三島弥太郎子爵の次女である。ヨーロッパに滞在する土方与志の留守宅は被災を免れるが、小石川林町の豪邸へは親族のみならず、近隣の住民百余名が避難した。のちに築地小劇場の運営にも尽力する梅子は、罹災者のため炊き出しや買いものに忙殺される。大地震から派生した危険、朝鮮人騒ぎや亀戸事件をも彼女は切実に感じた。

大地震の被災と救助（『土方梅子自伝』）

与志が出発した翌年の秋に私は敬太を連れてフランスへ旅立つことになりました。母はまたあとから来る

① 小山内薫著『小山内薫―近代演劇を拓く』慶応大学出版部、二〇〇五年。一八三―一八五頁。

予定でした。九段の学校も夏休みまで仕事をやめ、船の切符も入手し、すべて準備を完了して九月十日の乗船を待つばかりになりました。しかし、突然この出発は中止せざるを得なくなりました。九月一日におこった関東大震災によって、東京一帯が大混乱に落ち入ったため渡欧どころではなくなりました。

小石川の家は倒壊や火事の被害はありませんでしたが、その大きな地震は、ふるえ上がるようなこわさでした。家の中には、何時またゆりかえしが起って家がたおれるかもしれないので庭に難を避け、木と木の間に蚊帳を吊って、その中に入っておりました。満二歳の誕生日を間近かにひかえた敬太も、無事ではなかったが、家の中にあるおもちゃを欲しがって泣くのには閉口しました。第一のゆれは正午頃でしたが、夕方になるとあちこちで火の手の上るなかを、姑の実家加藤家や、叔母の嫁ぎ先の吉川家（もと長州岩国藩主）の人たちが、高台にある私たちの家を頼って逃げて来ました。近所の方々も庭の広い私の家へ避難して来られたので、日頃は家族数の少い土方の家も、この時は百人以上の人たちで埋まりました。・・・

わが家では百人以上の罹災者に、炊き出しをしなくてはなりません。主婦として私はその中止になって働きました。大急ぎで近所の米屋さんから俵のまま米をとりよせ、おにぎりを作るとともに、祖父母をはじめ、親戚の人たちのおかずも用意しなければなりません。人力車に乗って、本郷にあった当時としては珍しいカンヅメやハムなどを売っている食品店まで買い出しにでかけました。

しかし、その途中が大変でした。道路には焼け出された人たちがあふれ、人力車に乗っている私にかつてどなりません。「ばかやろうー!」「車に乗りやがってなんだい」「コンチクショオ!着物着て、すますてやがる、非常時だぞ!」

道端のあちこちの家もこわれたり、焼くすぶったりしています。引き返したいと思いましたが、主婦と

して大勢の避難して来た人たちの食事を用意しなければならない、今は自分にとってそれが一番大切な役目だと考え、決心して罵声を浴びながら小石川と本郷を往復しました。片腿をそのまま燻製にした大きなハムやカンヰメをたくさん買いこんで人力車に乗せ、小石川の家へたどりつきましたが、あの時のことを考えると、今でも苦しくなります。

地震や火災が一応収まったと思う間もなく、こんどは暴動が起るとの噂が立ちました。社会主義者や労働者、朝鮮人が火を放つとか、井戸に毒を投げ入れるとか云われ、軍隊がでたり、町の人たちが組織した自警団や、右翼団体が鉄砲や刃物、竹槍などを持って警戒にあたり、ものものしい状態になりました。

大きい家に住んでいる者はうらまれて、暴徒に襲撃されるとの噂も立ちました。私どもの家は爆弾をしかけられるかもしれないと注意され、緊張しました。しかし、これは結局デマで、実際に殺されたのは、労働者や朝鮮人、社会主義者でした。・・・与志はこの時、大切な演劇上の先輩を失ってしまいました。ヨーロッパに旅立つ前に、強い感動を受けた（労働劇団）の主宰者平沢計七氏はこの時、白色テロルのために殺されてしまったのです。大震災の時、平沢さんは純労働者組合の組合長でしたが、組合事務所があった大島町で自衛団をつくり夜警をしていました。三日夜の十時頃、事務所へ帰ったところを制服巡査にとらえられ、亀戸署へ連行されて、そのまま消息が絶えました。

多くの社会主義者、労働者、朝鮮人が警察や軍隊を中心とするテロルや自警団の暴力に殺されましたが、当時は真相を知らされませんでした。平沢さんもその夜亀戸署内で習志野第十三連隊の兵隊によって銃殺されたと、後にあきらかにされております。平沢計七氏と与志は直接の交際はないままに、平沢氏の虐殺となつてしまったのですが、与志の演劇の道にとって平沢氏は忘れ得ない足跡を残した方で、その方を警察や軍

のテロルに奪われたことは、与志のその後の人生にも影響を与えたように思います。①

他方ベルリンに留学中の土方与志は、九月二日新聞報道で大地震を知った。その一カ月後復興しつつある祖国への復帰を決意し、モスクワを経てシベリア鉄道で大陸を横断する。途上ロシア革命七年後の首都では、新たなソビエト演劇にも接した。小山内薫と約束した劇団創立の構想を練り始めるのは、この旅路においてである。

大地震直後の祖国復帰（土方与志『演出者の道』）

一九二三年九月二日朝早くベルリンのホテルの一室に眠っていた私は、一枚の新聞を持って入って来たボーイに起こされた。ボーイは同情というよりもお悔みに近い表情をして、持って来た新聞を渡した。いうまでもなくそこには前日の関東大震災のニュースが紙面をうずめていた。ここでは日本という島が太平洋に沈んでしまったかのように大げさに報ぜられていた。半年以上ヨーロッパ各地を演劇巡礼していた私はまず途方にくれた。

ちょうど一カ月目に、このまま勉強を続けようかどうしようか思いなやんでいる私のところへ、二通の手紙が舞い込んだ。その一つは親戚の一人からので、震災によって東京の劇場がほとんど潰滅してしまった。だからそれ等の復興がなるまで、ゆっくりそっちで勉強している、と書いてあった。他の一通は数年来左団

次一座で親交を結んでいた河原崎長十郎からの手紙だった。彼はくわしく東京の劇場や劇団の消息を報告してくれた。「歌舞伎座の鉄骨、灼けて鉛の如く」等という名文もまぎっていた。そして最後には、一日も早く帰って来て、東京の復興をいっしょにやろうというような事で結んであった。そこで私は、この二つの手紙を前に置いて迷ったが、結局河原崎の手紙に従って故郷―東京の演劇の復興に参加しようと決意した。

もうその時は日本の新聞等も手に入れる事が出来て、沢田正二郎氏が日比谷公園で野外劇を演じ、荒廃の中の市民の圧倒的な喜びとなったというような事も知ったし、また今まで色々な法律や条令で窮屈に縛られていた劇場建築に対する制約が緩和されて、バラック建ての劇場も許可される事も知った。そこで私がヨーロッパに出発する時に、小山内薫先生と帰国後は演劇研究機関を二人で作ろうという約束を思い出し、それをさらに拡大して、まず劇場を持った演劇・劇団活動を始めようと考えた。

まだ国交も開けていなかったソビエト同盟政府の、大震災をうけた日本の国民への同情と好意によって、幸い在外の日本人を最も帰国のための近道であるシベリア鉄道通過を特別に許可するという措置が取られた。私もこの特典を帰国の方法として選んだ。

第一次世界大戦終結、十月革命からわずかに数年後であり、近道といってもベルリンから日本まで一カ月もかかった。その途中シベリア鉄道に乗りつぐためには一週間もモスクワに滞在しなければならなかった。これはしかし、私にとつてたいへん有難い事で、その間新しいソビエトの演劇に、また社会やソビエト人の生活に接する事が出来た。

この一カ月の旅行中、私はバラック劇場の設計や劇場の座組等に関して様々な想像を楽しみ、一応成案を作った。十二月の終わりに私はようやく神戸に着いた。その翌日すぐに大阪に住んでおられた小山内先生を

尋ね、帰国決意以来の私の構想を話した。①

帝国劇場で初舞台を踏みながら、ふたたび家業に戻った山本安英は、横浜で焼け出された実母と東京の山の手で文房具店を開く。その商売を実際には安英が担い、仕入れのため高円寺から浅草の間屋街へも頻繁に出かけた。小山内薫から呼ばれ、築地小劇場最初の女優となるのはその翌年である。

大地震直後の家業専念（山本安英『新版 歩いてきた道』）

大正という時代も未近くに起って、数日の間に東京の文化を焼きつくしてしまったこの大事件は、私一人の生涯にとつても、また意味深いものだったのです。日本の新劇のある意味では出発点である築地小劇場が起ったのはこの焼け跡からであり、そしてしあわせにも私はその運動に最初から加えて頂くことができたのでした。

その前に一寸私個人のことを申しますと、地震の時実母は二人の弟を連れて、東京の私の家へ遊びに来ていました。そして私の家は幸い災害をまぬがれましたけれども、実母達の横浜の家は、その貧しい家財もろともに一切が灰になってしまい、こうして母と弟達はまた新しい生活苦に直面しなければなりません。母たちは養父の厚意から高円寺の駅のそばに小さな家を借りて、今度はささやかな文房具の店を出すように

なりました。うちが近くなったので、私はしばしばこの高円寺の家を訪れ、時には養家の許しを得て数日泊まりこむようなことさえありました。弟たちは学校へ通っており、母は病身なので、結局私が店を引き受けたいような気もちになって、一所けんめいに頭をしばって窓の飾りを工夫したり、商品の仕入れをしたりしました。私は小さい弟の手を引っぱっては浅草の方へ出かけ、あちこちと問屋さんの店を廻って、その年頃なりにせい一ぱい頭をひねるながら、鉛筆だとか帳面だとか筆箱だとかゴム消しだとか、そんなものを自分一人の宰領で仕入れては、小さな体に大きなふろしきを背負って高円寺の家はかえってくるのです。愛読していた樋口一葉に、私自身がなったような気になりすましていたこともあったようです。筑地小劇場の話が起って、小山内、土方両先生から私がよばれたのは、このようにして日々を送っている時でした。①

東山千栄子の夫河野通一郎が属する原合名会社は、富岡製糸場等を傘下とする横浜の絹物輸出業であった。革命の余波によりロシアから撤退したあとも同社は発展を続け、河野はさらにニューヨークやリヨンの支店へと赴任する。他方千枝子は苦勞の多い海外生活を自重し、以後は日本の留守宅でながく生活した。子どもを持たぬ富裕な奥様として、種々の趣味にも手を伸ばしながら、無為と倦怠を感じる日々と自伝では回顧される。神奈川における紡績産業の壊滅をはじめ、関東一帯の惨禍に直面して、三三歳の彼女は文明や世事の空しさに慄然とし、この世で生きる意義を懸命に考え始めた。

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』一九二〇頁。

帰国後の生活と日々の無為（東山千栄子著『新劇女優』）

ロシア革命の大正六年に日本へ帰って、それからここまでの六、七年間何をしていたかということになりますが、実はこの六、七年間は私にとって全くの空白であったような気がしております。それも自分の性格から来る一つの悲劇とでもいいでしょうか、何事もなくて大変苦しかった時代です。主人は永年築いた働き場所を失って失意の中にあるといっても、やがて仏蘭西に行き、アメリカに行き、また静養のため帰国して本店詰めでおります時でも、文学的な持前と共にいつも青年のような強い研究心で、身分や年齢にかかわらず、大學に行つて学生の中に交つて講義を聴くことさえも出来る、そういう風でけつして退屈することなく、従つて時の動きのよく解る人としていつも重用されておりました。それで商人というよりも書齋人的な風格がありました。そういう理解の中にながら何故か私は、なすことのない日暮らしている感じがしていました……

モスコで全部を失ったといつても、日本に帰って住む家に困るのでもなければ、明日の生活に心を砕くでもありません。女中が何人もいて、子供のない家庭の仕事は、めいめいの分担がらくに済みますし、これは主人について外国に行つて暮したとしても同じこと、私はいよいよ平凡な有閑夫人で眠り込む外なかつただろうと思われず。とにかく仏蘭西へもアメリカへも主人は一人で行き、私は日本に残っていました。もしも無理と一緒に暮したとしたら、私の剛情が目立ち、主人のかんしゃくがつのり、原因という程のものではなくて、どちらも面白くない、一般に夫婦のこういう時期のことを倦怠期といっていますが、二人が

一致して打込む仕事のない悲哀、殊に一方がまるで手あきでいる状態では、余計に空虚が目立つのでした。こんな風で表面は一応調った生活をしながら、過ぎて行く月日をとらえる術もなく暮らしているところへあの大震災が見舞いました。下町の住居ではありませんから、直ぐに戸外にのがれて、身命に及ぶような被害は受けませんでしたけれども、瞬間に行われた帝都の大破壊の前に、私は初めて長い眠りの眼をさまされました。①

震災の衝撃と人生の転換 (東山千栄子著『私の歩んだ人生』)

日本に帰ってから、主人はリヨンやニューヨークなど海外の勤務がやはり多かったのですが、私の方はおう外国生活がいやになり、日本の留守宅に残って、当時の流行語でいう有閑夫人の毎日を送っておりました。とにかく退屈でたまりませんので、その倦怠と無為とをまぎらわすために、いろいろなおけいごとをしてみました。しかしどんなに精を出してみたところで、どれもこれも興様芸以上に出ないことを、私は自覚せざるをえませんでした。

そこへ来たのが、大正十二年九月一日の関東大震災でした。思いもかけなかったこの突発的な天災で多数の人命があっけなく奪われ、家や施設が灰燼に帰してしまいました。その悲惨な現実には直面して、私は人間とはなんとほかないものだろうということを、つくづく感じさせられました。そして、自分を省みたと同時に、愕然としました。

① 東山千栄子著『新劇女優』五二―五四頁。

私はいったい何だったのでしょうか？ ただ生まれてきたから生きているというだけで、これではうじ虫の命と同じだと思いました。私のこれまでの生活は、あってもなくてもいいような、希望も理想もない、ほうとうにむだな、くだらない生活だったので。子供ひとりない私は、子供を育て上げるという、大切な母親の義務を果たすこともできません。河野の家の両親もすでに夜を去っていて、お世話をしあがる人もおりません。生活費をかせぐこともなく。ただ主人に食べさせてもらっているのです。

自活できない、無力な女の生き方に私は疑問をいだきました。そして、なんとか勉強して、独立できるだけの教養を身につけねばならない、そこからほんとうの私が始まるのだと考えました。

私はそう決心してまず本を読みはじめました。それはいわが手当りしだいの、秩序のない乱読でしたが、とにかくこうして私は、なにものかをつかまなければならないと決意したのでした。①

房総半島北条へしばらく転居した及川家では、避暑地での快適な自然と交遊によって娘道子の健康もかなり回復した。小学五年生の夏休みも明けて、帰京と登校の準備を始める九月一日、館山湾沿岸も激震と津波に襲われる。道子など子ども三人は倒壊する家屋の下敷きとなり、辛うじて知人に救出された。自伝『いばらの道』には苛烈な地震と避難の様相が、繊細な感性をとおし仔細に語られる。

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二九―三〇頁。

いよいよ今日から九月という日は、朝早く通り魔のようなひどい嵐があつて、それが過ぎた後は、また気味の悪い程のいいお天気になりました。お昼近く母は裏の井戸端でたらい一杯のお洗濯に忙しそうでした。父は一等小さい弟の菊夫を抱いて、お守りをしながら庭を散歩していられました。和夫と冬生は奥の間で佐々木さんを相手に何かおもちやをいじつて遊んで居りました。そして、私と強子と従姉の浜ちゃんとの三人はお茶の間でおままごとに夢中でした。

そのお茶の間の窓近くには大きな橙の木がありまして、その実を取つて遊んでいたのですが、丁度強子がそれを採ろうとして、手を伸ばした瞬間、不意に沖の方で雷の鳴るような音がしたかと思うと、いきなりミリミリ、バーンバーン、ガクガク！という物凄い響と共に、柱は折れ曲り、襖障子は弾け飛び、壁は崩れ落ち、家は今にも揉みつぶれるようで、畳はまるで波のように揺れうねり、棚の上のものは何一つ残らず転げ落ち、一瞬にしてあたりは言語に絶した修羅場と化していました。

私はとっきの場合に、日常父から地震の時はあわてて外へ出てはいけない、と教えられたことを思い出し、三人一塊となつて、畳にうつ伏してしがみついています。いえ、その場合出ようにも、どうしようにも、立つことはおろか、腹ばうことすら出来ないのです。・・・

そのうち震動が少し小止みになった隙を見て、佐々木さんに抱かれるようにして、弟達は戸外へ飛び出して行きました。これを見て私達もこの時だと思つて、三人一緒に二、三步歩みかかった時、ああ何という恐ろしいことだったでしょう。前よりも一層物凄い地鳴りと共に、もっと激しい震動が襲つて来たと思う間もなく、倒れかかっていた柱、崩れ残っていた壁、そして落ちかかっていた天井が、この時とばかりに鋭い悲鳴をあげて、一時に私たちの上に覆いかぶさつて来ました。手をひいていた妹を護ろうと、自分のからだを伏せた瞬間、どしりと重い板のようなものに押え付けられたと思うと、そのままあたりは真暗闇になつて、何も見えなくなっていました。・・・

屋根、天井、柱と三重にも四重にも抑えつけられた私達を掘り出すには、とても父と佐々木さん二人の手に合わず、と云つて隣近所どこでも皆同じように困っている時とて、手伝つて貰うことも出来ず、氣ばかりあせつて弱り抜いておられるとき、折良くいらつした高等師範の方々に手伝つて貰つて、先ず従妹、それから私と掘り出されましたが、最後の強子は大きな重い柱に片方の足を押しつけられているので、これを引き出すのに随分手間取りました。その間強子が腹を千切られるような悲しい声をしぼつて「もうこれからいい子になりますから、助けてください！」と泣き叫んだあの有様がまだ目にみえるようです。

こうして幸いにも一同命に別條なく、顔を合やすことが出来て、庭の大きな橙の木の下に、寄り添つてホット一息ついていると、またしても大きな震動がやって来ました。薄気味悪い地鳴り、亀の甲形に裂けて行く地割れ、そこから噴き出す水、そしてあちこちに起る人畜の悲鳴―これこそ全くこの世の終りかと思われしました。

この時父はつと立ち上り、泣き叫ぶ一同をおししずめながら、諄々とした非常時に処する態度を訓えたのち、両眼に涙を浮かべながら悲壮な声を張り上げて、「主よ、みもとに近づかん、のぼるみちは、十字架にありとも、など悲しむべきや、主よ、みもとに近づかん」と讚美歌を歌い出しました。そして、歌い終ると一同深いお祈りをいたしました。

このとっさの場合の、こうした父の落着き払った態度に、威圧と限りなき信頼を感じてか、付近の人々までが、私たちのまわりに寄り集まって来て、みな一様に鳴りをしづめて父の言葉に耳を傾けていました。

するとどこからともなく、津波が襲って来るかもしれない、という警報が伝って来ましたので、みんな山の方へ逃げなければならなくなりました。強子だけは足を柱で押しつぶされて、ひどい怪我をしてとても歩けませんので、米屋のリヤカアを借りて運びました。

山の上に来て見ますと、そこはすでに避難している人々で一杯でした。泣くもの、喚くもの、唸るもの、また傷けるもの、死せるもの―折柄後ろの森に沈もうといている赤い夕陽にてらされて、それらの人々の姿は戦乱の巷もこうあろうかと惚げられるほどでした。

ところが夜に入ってから、ここもまだ不安だと云うことになり、子供たちだけでもっと上に登って、そこにやっと落ちつきました。そして毛布を敷いて貰って休みましたが、いつ襲うかも知れない地震と津波に対する恐怖に加えて、折柄燃え続けていた隣村の山火事が、だんだんこちらにも移って来そうに見え、燃えさかる火を見ては、恐怖が募るばかりで、周囲はいつまでも騒々しさが止まず、殆ど眠ることも出来なませんでした。

それでも明け方少しは眠ったものと見え、朝眼を覚まして、何気なく上を仰ぎますと、そこにはいつもの天井の代りに低く覆いかぶさった松の枝の隙間から高い空が覗いていました。そして、丁度東の空には真紅な太陽がやっと上りきったところでありました。

隣りに寝ている強子ももう目を覚まして、繻帯を巻きつけた足を毛布の裾からのぞかせて、痛そうに顔をしかめながらも、心配そうに私の方を見守っています。私はふと寝返りを打とうとして、体を動かしますと、

胸のあたりがズキンズキン痛むので、恐るおそる手を触れて見ますと、いつの間にか繻帯が幾重にも胸に巻きつけられていました。―あとで知ったのですが、屋根の下敷きになったとき、肋骨を挫かっていたのを、寝ている間に手当されていたのです。

段々明るくなるにつれて、周囲に目をやると、右にも左にも、前にも後ろにも、頭や手や足を繻帯した怪我人や、むしろや布切れに包まれた死人が無数に転がっています。私はその惨状にゾツとしてしまいました。

その日のうちに、海岸にあったパラーの天幕を持って来て、諏訪森の丘に小屋を建てて、その中に私たちは収容されて、こうして私たちの山の生活がはじまったのでした。 ①

自由劇場第四回公演の一つとして戯曲『河内屋余兵衛』を抜擢された吉井勇は、本来『明星』にも寄稿した歌人であって、大正十年最初の歌集『酒ほがひ』を世に問うた。震災第二年の六月大阪プラトン社により上梓された『夜の心』には震災を詠じた「業火余燼」二六首が収録される。なお、大地震の翌月刊行された雑誌『文章倶楽部』特別号（凶災の印象・東京の回想）には、白鳥省吾の詩「灰燼の中から」等とともに、「業火余燼」のうち十首が掲載される。

吉井勇 「業火余燼」『夜の心』（『定本吉井勇全集』第一巻）

何ごとの曠りかしらぬ地震ひぬ 天意え解かずをのきて居り
人死にぬ修羅道のごと人死にぬ かなしいかなや人の死ぬこと
うち日さす都もほろぶ時来ぬと 業火のまへにをののきて居り
地獄絵をまざまざと見て思へらく 現身はいとあはれなるかな
いまもなおほ目に残れるは焼あとの 芝香が墓の寒きまぼろし

人を焼く煙とともに雨は来ぬ 冬まだ来ぬに寒き雨かな
怖ろしき幾夜を重ね生きながら 地獄の道をたどらむとする
空遠く飛行機見えて天日は ものすさまじく落ちむとするも
夜もすがら絶えず聴こゆる地の声に ふるへをののくわが心かな
吾子は寝ぬわれは眠らで夜を守らむ この怖ろしき更けがたき夜を

そのむかし馬楽と見たる月に似し 月はあれどもすさまじき夜やめ
大地の曠りとすればこころよし地震も畏れでかく云うや誰
生きながら黄泉のすがたをみるこゝろが いか悲しきものとかは知る
酒甕の覆るさま目に見ゆと 無頼のこゝろ地震にほほ笑む
そのかみの別れに君と聴きしごと 地震の絶間に鳴ける虫かな

馬楽忌の酒に更けたるかへり路に 見し浅草の月に似る月
すさまじき夜ながら空にかかれるは 黄楊の櫛にも似たる月かな
大空の月いと細し夜ごとの 心細きに月も瘦せけむ
ありし日の銀座思ひて涙落つ 世に亡き人をしのぶこゝろに
華やける人の末路を見るごとき あはれさ覚ゆ今日の銀座は

わが胸も焦土となりぬいかにせむ 寂しかなしと云う人も見ぬ
馬楽の忌小せんの忌など思ひつつ われ浅草の焼あとをゆく
浅草も焦土となれば焼あとの公孫樹も寒き秋なりしかな
源治店の路次もいまなし ありし日の人のおもかげいかにもとめむ
江戸名所図絵もほろびぬ わが夢も消えて空しと嘆けるや誰
うち日さす都のなかをたもとほり しみじみと知る現身の秋

①

大地震の五カ月前土蔵劇場での公演を無事果たした秋田雨雀は、七月初め有島武郎の葬儀に列したあと、月末

① 吉井勇著『夜の心』（『定本吉井勇全集』第一巻、四一―四一三頁。）

〔参照〕吉井勇「業火余燼」『文章倶楽部』大正十二年十月特別号（凶災の印象・東京の回想）、三三三頁。

東北への講演旅行に出発した。東京での大震災火災を知るのは九月二日青森においてである。丹念な『秋田雨雀日記』に八月二九日から九月一日までの執筆は欠如するが、以後数年間の絶えざる震災日誌はとくに貴重である。

震災日誌（『秋田雨雀日記』大正十二年）

九月二日 朝驚くべき報道に接した。大震と火災のために東京市全滅の報に接した。一日正午正十二時ごろ上下、水平の振動起り、大建築崩壊。十二階、ニコライ、三越、松坂屋など焼失。火は全市をなめつくしかかっている。―第一報をきき、老農社へ遊びに行く。―宿屋へ帰ると、第二報、第三報がきていた―戒厳令発布の報―自動車で魁へいき、回報をみて、枋内農学士の宅により、帰路再び魁に寄り、食糧略奪、抜劍の報を受け、自動車で土崎へ帰った。今夜こそ怖るべき夜だ。今夜は怖るべき夜になりはしないか？

九月三日 暴動化はしないか？東京の家族も心配になるので、足助君とわかれて、黒石へかえった。黒石では電報をみて、東京へ出発したものと思っていた。明日東京へ向って出発の用意をする。小坂、北岡、鳴海の諸君来訪。東京の様様について語った。

九月四日 東京市の八分まで全滅らしい。きょう黒石を出発。出発前に朝鮮の鄭風吉君が訪問してきたので、警察ではだいたい問題にしているらしい。刑事が朝からつきまきりである。午後一時の汽車で出発。川部でそばをたべた。淡谷君の家へより、それから盛を訪ねた、水筒を淡谷家から借り、食糧をととのえて夜の急行に乗る。上京客で立錐の余地もない。宇都宮の参謀大尉と同乗。朝鮮人の流説の調査をきいて皆で笑った。しかし国民の軽率には驚く。沿道は戦鬨気分だ。汽車が遅れて、赤羽に二時ごろついたので、小学校へ一泊。

九月五日 赤羽の小学校では教師が救護につとめていた。親切に対応してくれた。同行十人ほどテーブルの上に眠った。夜なかに一回地震があったので驚いてとびだして、時計のガラスを破った。はじめて大震災後の東京へはいるしたくをした。自分の家のことなど心配しながら、池袋行の汽車に乗った。まるで戦争だ。

九月六日 午前中に雑司谷へつく。家は安全！食糧はいくぶん給与されていたが、全体として食糧欠乏、避難民は全部給与。比較的よく手廻しができていた。戒厳令―自警なぞでもものしい。朝鮮人虐殺は問題になるらしい。今日では反対宣伝をしているが、むずかしい問題になるらしい。妻も田中君も赤ん坊もみんな元気でいるので安心した。しかし、驚くべき損失は直接間接にぼくらに影響してくるだろう。・・・

九月十一日 朝鮮人問題につづいて社会主義者の検束の話がでている。小川君とぼくは検束されていることになっているのだそうだ。小川、藤森、生方の三君を誘い、前田河広一郎君の検束の話をきいた。自警団だ密告したらしい。藤森、小川君などが弁解して、取り返してきたそうだ。夜警。（大門会）・・・

九月二六日 高木、松田の諸君が写真を撮ってくれた。（大杉君はリーブクネヒトと同じ運命にあった。）戒厳司令官福田大将交代。憲兵隊長罷免、甘粕憲兵大尉軍法会議廻附の事が理由不明のまま問題になっていたが、きょうはじめて発表された。甘粕憲兵大尉は平素社会主義に反感をもっていたが、大震後無秩序の状態に際し無政府主義の巨頭大杉らが不穩の行為にいずれを恐れて、大杉ほか二名を某所に連出して、銃殺したという犯罪分明にされたので、軍法会議の附せられることになったのだそうだ。大震に比較すべきほどの

大事件だ！国民の無智は怖るべきことだ！清藤君大鯨から来た。（大杉君銃殺の報（大いなる損失））①

十一月十三日 『解放』の戯曲着想。二つほどえた。一、震災にヒントをえた、避難民を主材としたもの、一、牢獄と二つの窓。表現主義ふうのもの。このいずれかを創作してみよう。ずっと主観的なものでいい。曉民会の川崎悦行君が市ヶ谷監獄で病死したという通知をうけた。立派な青年だった。仏教から生まれた社会思想家だ。二四才。不穩文書の件。午後高田保君に会い、ふたりで運天女史を中野に訪い、牛込でた。中野のカフェ・アザミによった。夜大門会にごたごたがあったのを仲裁した。……

十一月二十日 松本弘二君がきて『解放』が三月に延びたということを知っていった。戯曲は月末に脱稿することにした。『女性改造』の短い感想「わが子の行末を見守りて」のために短いものを送る。「子供は自然の子」とした。

十一月二三日 かなりな強震。いいあたたかい日。茅野家から死んだ娘さんのくやみの返しがきた。佐藤君がきたのでふたりで墓地のほうへ歩いていった。酔って憲兵隊につれていかれた話をしてた。おもしろい男だ。夜千代子をつれて東洋大学へいく。記念会で『国境の夜』をやっていた。校庭での屋台舞台。月光に照されて五、六百人の人が見物していたのはおもしろい感じをあたえた。舞台装置は丸太小屋なのがよか

① 『秋田雨雀日記』第一巻、三二二―三二四頁。

った。グレゴリーの『月の出』もやった。千代子と二、三のカフェによって帰った。①

大地震の翌月雨雀も雑誌『文章倶楽部』に詩編「死の都」を掲載し、十一月には戯曲の執筆を再開した。②
着想されたのは青森へ逃れた被災者の苦境で、救護先における朝鮮人騒ぎを含み、表現主義による錯乱場面がフイナーレをなす。翌年『演劇新潮』に発表された脚本『骸骨の舞跳』をここに抜粋する。

避難先での不穩（秋田雨雀脚本『骸骨の舞跳』）

人物||青年、老人、看護婦、医長、○○人、自警団員（後に骸骨）、貴婦人、避難民男女、其他

場所||救護班のテント（立体派風の舞台装置を可とする。所謂マヴォ式の試みも面白いであろう）

老人 じき夜が明けましょうか？

青年 夜の明けるまではまだ二時間もありません。

老人 そうですか・ああ何んてことでしょうね・こんな年になってこんな目に逢うなんて・あれは

何んの音でしょう？

青年 何でもありません、汽車の音です。あなたは何時ここへ降りたんですか？

① 『秋田雨雀日記』第一巻、三二二―三二四、三三〇―三三一頁。

② 『文章倶楽部』大正十二年十月特号。三七頁。

老人 ゆうべです・・ゆうべ遅くです・・一体何んて話でしょうね・・こんなばかな話があるものでしょうか？

青年 東京でやっぱりひどい目にお逢いでしたか？お互いに飛んでもない眼に逢いましたね。

老人 ひどい眼位じゃありません・・私は娘と孫に死なれてしまいました・・それに私は病身でして、そんな事をして旅なぞ出来る身体じゃないんですけれども・・

青年 然うですか、お気毒ですね・・そして娘さん達や孫さん達は何処で失くなったんですか？本所ですか？

老人 いえ、向島です・・私共は三十年向島に住んでいましたから・・何んでも近所の人の話では娘は孫をつれて土手に逃げていたのを、人に押されて大川へ落っこってしまったんだそうです・・

青年 それはお気の毒なことをしましたね。あすこでは随分そんな人があったそうですね。あなたはそれによく逃げられましたね・・

老人 一層死んだ方がよかったですよ・・娘や孫に死なれて何が楽しみで生きて行かれますか？

青年 そうお思ひになるのも無理はありません・・でも世の中は生きていさえすれば、また何とかなりましょう・・いや実は僕自身もいまのところ何の光明もないんですが・・然し生きている間は生きていなければなりません・・

〔中略〕

看護婦 気分のお悪い方はありませんか？

避難者 看護婦さん、先生を呼んでくださいな・・お腹が痛んで仕方がないんです・・

避難者 看護婦さん、私に水を一杯ください・・

避難者 看護婦さん、この身体で船に乗れましょうか？・・

避難者 看護婦さん この切符で只で船へ乗れましょうか？

看護婦 皆さん、静かにしてください。そう一度におしゃっちゃん何うすることもできません・・(老人に) あなたは今夜船にお乗りになれますか？

老人 私はそれをおあなたにお尋ねしたいんです・・もう少しここへ置いていただく訳に行かないでしょうか？・・何うも身体が痛んで仕方がないんです・・

看護婦 そうですか？今先生がいらっしますから診察していただいたらよろしいでしょう。

〔中略〕

そのとき一団の自警団員がテントの中に入り込んで来る。甲冑を着て抜刀をした者に統率され、在郷軍人の服装をした者、陣羽織を着た者、鉢巻きをした者、学生服を着た者、各々手に槍刀剣類を携えている。

甲冑 看護婦さん・実は探し物があるんですが、一寸テントの中へ入れていただきます・・

看護婦 そんなに入って来ちゃ困りますね。患者が寝ているんです。

鉢巻 一々断る必要ねえじゃねえか・・さあ勝手に入って探そう・・

看護婦 (唇をふるわせて) いけません・・入っちゃいけません・・

甲冑 看護婦さん、実はこのテントのなかに○○○○○○・・現に汽車から降りるのを見た男がいます。
・・○○○○○○

陣羽織 ○○○○○○○・・市民の安寧のためです・・鉢巻

在郷軍人 そうだ、市民の安寧のためだ

鉢巻 ぐずぐず言っていないで早く探そう・・・なんでもやっつけちまえ・・・

自警団員は提灯を振り廻して避難民の中を歩き廻る。看護婦は蒼白な顔をして一団の後を追うて行く。自警団員の一人は、老人と青年の背後に子犬のようにしゃがんでいる一人の男の周囲に立つ。

鉢巻 こいつだ！・・・こいつだ！・・・提灯を出せ・・・皆なこの顔付きを見ろよ・・・

ある男 (二四、五歳の労働者風の男) 僕は何もしないんです・・・

学生 (真似をする) 私はなにもしないんです・・・

陣羽織 やっつけちまえ・・・やっつけちまい！

甲冑 乱暴なことをするな・・・己れが今調べて見るからな・・・おい、○○○○？嘘を言っちゃ為にならな
いぞ・・・

ある男 僕は日本人です・・・皆さんはなにをするんです？ ①

① 秋田雨雀著『骸骨の舞跳』叢文閣、一九二五年。三一―二三頁。

〔参照〕「秋田雨雀と表現主義―秋田雨雀と関東大震災の戯曲」(大笹吉雄著『ドラマの精神史』新水社、一九八三年。)